

南画院展出展について

南画院は、昭和21年(1946年)に、新時代の南画の普及と発展を目指して創立され、以来、70数年を経ながら自然風物、それ等が持つ躍動的な生命感を画面に表すと同時に気品の高い清らかな心を表現することを目標としてきた伝統ある画壇です。

美術展には、水墨・墨彩の南画の他に、洋画・工芸、写真、書も出展されており、多彩な迫力ある作品が展示されます。

今回、南画の部に次の3点を出展しました。

早春の槍ヶ岳

夕映えのジャンダルム

暁の剣岳

朝夕の陽光に染まりゆく、白銀の岩稜の情景を描いたものです。

日本アルプスを代表する岩峰のスケール感、眺望を作品から感じ取られて、臨場感溢れる鑑賞を楽しんで頂けたら幸いです。

槍ヶ岳について



早春の槍ヶ岳 (墨、顔彩 M100号 112cm×162cm)

早春の夜明け前、蝶ヶ岳から槍ヶ岳を眺望する。

雪解けと共に、春を告げる新緑の絨毯が槍ヶ岳すそ野を彩り、頂上に至る白銀が一層に鮮やかさを増して、槍ヶ岳が君臨するがごとくである。

プレート活動により、日本列島は東西方向からの圧力により地殻変動が活発化し、山地の隆起と盆地の沈降が顕著となり、断層の動きや火山活動が激しくなって、その結果、中部山岳国立公園内にある槍ヶ岳、穂高岳等も出現した。

造山活動に伴う火砕流で、大量のデサイト質溶結凝灰岩が噴出して、現在の槍ヶ岳・穂高岳の険しい稜線が形成され、山肌には、その後の浸食で現れた溶結凝灰岩の堆積構造の断層を観察することができる。

「早春の槍ヶ岳」にも、槍ヶ岳からの山稜に出現した断層を描き入れており、すそ野も注意深く見て貰えたら、段階的に断層が描き込まれていることに気付かれると思う。

槍ヶ岳は、造山活動に伴う日本アルプスを代表する大自然のモニュメントであり、また槍ヶ岳から南岳に至る山稜は、気品高く神々しい佇まいである。

ジャンダルムについて



夕映えのジャンダルム(墨、顔彩 P50号 80cm×116cm)

ジャンダルムは、西穂高岳と奥穂高岳との縦走路途上にあるドーム型の天を突く岩稜であり、閃緑斑岩の柱状節理でできている。

名称はフランス語の「国家憲兵」の意味であるが、山岳用語としては、尾根上の通行を邪魔する岩を意味して、スイス・アルプス山脈のアイガーの垂直絶壁の通称に由来して、奥穂高岳においても、面前に立ちのぼる前衛峰としてジャンダルムと名付けられた。

ジャンダルムの北側には、ロバの耳・馬の背と呼ばれる急峻な痩せ尾根の難所が続き、危険なルートを形成している。

夏場、西穂高岳からの奥穂高岳へのルートを縦走したが、アップダウン、浮石・ザレ場が多く、途中に天狗の頭の逆層スラブの難所があり、またルート判断も難しい。

最大の難所のジャンダルム・ロバの耳・馬の背が、最後に待ち受けており、肉体的な疲労に加えて精神的にも相当な重圧がかかり、フィジカル・メンタル共にハイレベルなバリエーションルートである。

ジャンダルム・ロバの耳の柱状節理の岸壁下降、鋭利なエッジロックの**馬の背**の登攀を終えて、奥穂高岳山頂に辿り着いたときの安堵感は、何事にも替え難い達成感がある。

奥穂高岳から西穂高岳への逆縦走もあるが、馬の背の下降等が非常に危険なルートに変貌して滑落事故も多発している。

どちらからアタックするにしても、ロングランの最難関のルートであるので、安易に挑戦してはならない。

劔岳について



暁の劔岳(墨、顔彩 M80 号 90cm×145cm)

劔岳は、花崗岩でできた名峰である。

(※閃緑岩と班れい岩の硬い岩から構成され、それを輝緑岩が貫いているとの説もあり。)

劔岳が鋭くとがったピークとなったのには、マグマの影響が大であり、7000 万年前に、

山頂の北側の割れ目にマグマの上昇する貫入があり、既にあった古い花崗岩を焼き、劔岳花崗岩と呼ばれる岩体が作り出され、更に 700 万年前に、今度は東側の劔沢辺りに別のマグマが上昇してきて、再度古い花崗岩を焼いて、二回にわたって古い花崗岩に焼きが入れられて岩石の組織が締まって硬くなり、風化による浸食に抵抗して尖ったピークが維持されて今日の雄姿が形成されることになったようである。

劔岳の名称が初めて文献に現れたのは、1585 年の豊臣秀吉が近畿の寺社大名に送った書状とされているが、刀鍛冶が焼き入れするようにマグマにより焼き入れされた岩峰に、まさしく劔の名称を与えていたとは、面白い成合に思われるが、若しかして当時においてもマグマによる焼き入れの認識はあったのであろうか。

劔岳には、難所の「カニのヨコバイ」・「カニのタテバイ」の鎖場がある①一服劔→前劔→本峰への一般ルートと、②八峰の 5・6 のコルから 7・8 峰を経て本峰へのバリエーションルートの 2 ルートから登攀している。

どちらも迫力あるルートであり、アルピニストにとっては気持ちを揺さぶられるルートであるが、なかなか手ごわい峻険な岩峰であり、また日本海から季節風に直接さらされて、急激な天候悪化もあり、事前の予報チェックは必然である。

八峰には「クレオパトラニードル」と呼ばれるユニコーンの大岩があり、またすぐ隣に「チンネ」と呼ばれる有名な扇型ドームの岩場がある。クレオパトラニードルにトライしていた時、隣のチンネに登攀しているクライマーが居たので、互いに健闘をたたえて挨拶を交わした。

当時、頂上からの眺望は記憶に残っておらず、社に礼拝したこと位しか覚えていない。

たぶん登攀に集中しており、他のことには気を配る余裕はなかったものと思われる。

今回の「暁の劔岳」は、早春の夜明け前の朝陽に染まりゆく山稜の情景を描いたものであり、岩峰と残雪が程よく稜線に現われており、峻険な劔岳の特徴は表現できていると思われる。

80 号の大画面にできるだけ細部にわたり描写することで、立体的な深みのある表現が可能になった。

是非とも劔岳の雄姿を、臨場感を持って鑑賞して戴けたら幸いである。